

エッセイ

# アイパッド マイパッド

## iPad || MyPad

稲瀬 隆

2年ほど前から、いわゆるタブレット型のPCを持ち歩くようになった。電話のふりをしてネット社会に老若男女を誘惑する「隠れPCスマホ」というやつが好きになれず、「ガラ携」にしがみつきながらの、padユーザーになったわけだ。契約回線の制限もあってか、道に迷った時にすぎる地図情報などは、スマホの方がよっぽど使い勝手が良い。それでも細かいこと（字：つまり老・眼だ！これは、差別用語では？ ない・・）が苦身な身の上には、情報集約画面が手のひら大では、辛いのだ。

振れば、通り過ぎた時間の断片がパラパラ落ちてきて楽しい。これを拾い集め繋げると、それなり、徒然エッセイになる次第。

■「フォー・ザ・チームの力」 (ワールドカップ3戦無勝 6月24日)

日本は、戦前の期待を見事に裏切り、勝ち星無くブラジルを去ることになった。原因はいろいろ語られるが、結果論の感がぬぐえない。前回の南アフリカ大会は予想外の健闘だった。その翌年のアジアカップ優勝あたりがひとつの頂点だったのか？ あの時、決勝戦で、試合を覆う暗雲をスカッと切り裂いた李忠成（現・浦和レッズ）のポレーシユートには、心底感謝した。ほればれした。さらにその後のおぼあちゃんコメント」には、ほろりとした。大会前には一部で国籍を巡ってどうこう言う声もあった。だが” For the team!” チームのために！ 目指すところが一つになる時、出自など問う意味が無い。そう実感した瞬間だった。

思えば当たり前のことかもしれない。たとえばプロ野球のチームは、互いに競い合い、時にはスパイまがいの情報

そもそも電話ではないので無論、通話はしない。Sky peとかFace TimeとかでTV電話にする人もいるが、何処で何をしているか、随時、覗かれるような代物は持ちたくないもので、そんな野暮な設定はしない。いきおい主たる用途はメールチェックやネット検索など、いわゆる情報端末ということになるが、ほかに重宝しているのは、記録装置としての機能である。メモを書き、写真を撮り、動画も撮れる。ちよつとおもしろい風景、気になる記事、ふと感じた疑問や感動、いろんなものが詰め込めるスケッチ・パッド兼メモ・パッド。時折、そんな玉手箱を逆さに

戦略まで練り広げる。だが同時に、各チームはその戦力向上を図って活発に人事交流||トレードも行う。読売巨人の選手が横浜に行ったからといって、対戦時に故意に落球したり、三振したり、手を抜くことはない。皆、おのれとそ

のチームのために全力を尽くしている。統一ルールの下で、すべてのプレイが衆人環視のうちに行われ、不正の行われる余地がほぼないに等しい。これも大事な点だろうが、今、前大統領の愚行から始まった日韓の相互不信が、ひとつの極に達している感がある。だがそれは国レベルの話と割り切りたい。国家の間に友情はない、という言葉もあるように、そもそも独立した国同士がべったり仲良い必要はないからである。各国がその歴史と文化を背負い、それぞれの事情と体力に合わせて社会を運営している。ルールや制度が異なれば、その有効範囲に境界があるのは当然と言える。刑法も社会保障も、国境のない適用拡大はありえない。とはいえ欧州の諸国を見ると長い歴史の中で、互いに利害の衝突と妥協を繰り返しつつ、共存している。プロスポーツのチーム間には友情が必要なのと同様、それぞれがより良い国になることを競い合い、世界全体での調和を図る。それが環境問題も含め、共存共栄に向かうなら、言

うことはなかるう。今、自分が住み、家族が生活するこの社会がより良い方向に向かうなら、日本社会というチームの一員として本当に一緒にやってゆけるのなら、どこから来た誰が仲間に加わろうと構わないように思えるのだ。

李大浩の豪快なホームランと笑顔が好きである。彼らが特定の国の出身だからと言って、好かない理由はなにもない。

■「死後の思い」 盆の入り 7月13日

とつぜん、妻が妙なことを言い出した。

「お義父さん、いまごろ何考えているかしら」

「ん？」と、私は答えに詰まる。冗談で言っているのだろうか。軽いメルヘンの会話なのだろうか。

妻は続けた。

「お義母さんが、死ぬのはちつとも怖くない、とか、お義父さんのことを口にしなのは、向こうの世界がどんなのか、知ってるからかしら」

ますます私は戸惑った。妻は無神論者だ、と信じ込んでいたからだ。彼女は普段、文化的にはキリスト教圏にあるものの、宗教的、神秘的な事象にはまるで関心が無い。占

いや信仰、霊や神秘を全く、それこそ全く、信じていない。まさに、歯牙にもかけない。それが、である。

そういうえば父が死んでから、しじゅう墓参りを気にしてはいた。自家の墓は鎌倉にあり、遠い。だからもし将来、自分が入っても誰も来てくれないのではないか、さびしいというのだ。考えもしなかった。死んだ自分の意識がどうあるのか、など。なんとなく、「そこに」あるはずもないという感覚は、皆に共有のものと信じていた。「そこに」意識があるなら、狭くて暗い石の下に閉じ込められていたくはない。だから、「風」に「雨」に「光」になることを、人は願うのだ、と。

動物の意識と植物の意識、という表現がある。「生者の意識は動物の意識、死者の意識は植物の意識。」20年前に亡くなったK教授がつぶやいた言葉である。植物には、中枢神経システムが支える高度な自我はないが、生存と生殖に対する漠たれど確たる意志はある。死者の意識が植物のものとするならば、少なくとも自己の維持と子孫繁栄への指向だけは、その核にあるだろう。

ある日、ふと思ひ浮かび、納得した至極当然のことがある。今日の社会を作ってきた歴史上の人々は、みな悉く死分ならず、成績も急激に落ち込んだ。周囲のすべてに疎外感を覚えた。目に映るものすべてが曇りガラスの壁の向こうにあつて、現実感がなく、ぼやけていた。

この壁を壊してくれたのも件の教師だった。大仰に振りかぶる「痛くない」ゲンコツと、保護者面談による母との連携が、「死ねば消え去る世界」でも、肌で感じ取る人の触れ合いには「生きている限り」生々しく重みがあることを気づかせてくれた。彼は、後々知った話では、欠点だらけの人物だったようだ。しかし子供たちからはおおいに慕われていた。彼は大人の世界と子供の世界を切り分け、立派に役を果たしてくれたのだろう。その先生も数年前、不遇のうちに他界されたと聞いた。

死者は人の心に居る。それは単に思い出になる、というのではなく、誰かに思いおこされる時、確かに思いがそこに生き返る。さまざま電波信号が、TVやラジオに受信され、再生されるように。そう思える。

オランダの画家ゴッホ (Vincent Willem van Gogh) が残したとされる詩に、共鳴できる一文があった。

死者を死せりと思ふなかれ

んでいったのだ、と。無限の死の上に、今の自分がある。しかし、人が作り出した時間と空間の中だけで呼吸をしていると、自然や宇宙の大きさとそれらへの畏敬を忘れてしまう。子供がこの世のすべてを身の回りの尺度で計るのにも似ていよう。所詮、自分の生だけを例外だと思ふのは、己しかない。また、「生と死」を、自分と、せいぜいその周りの近い者だけで見ていると、死には「失う」イメージしか浮かばない。その結果、大自然の法則に身をゆだねて生き、そして死んでゆくことが絶望的なほどに耐え難い苦痛となる。

確か小学校3年生の頃だった。なにがきっかけだったのかわからないが、極度の“自閉的”感覚に陥った経験がある。自分が感じ、触れ、見ているすべてのものは映画のような虚構の空間に等しい。自分が死ねばすべては消える泡沫(うたかた)の世界だ、と。日々、友人との会話もなく、授業中もつねにボーッとしているようになっていた。今から考えればクラス替えて新たな人間関係が作れていなかったこと、近視が進んで黒板が見えにくくなっていったこと、などもあったろう。新学期に始まった九九の授業で、「1」を「イン」と奇妙に発音する熱血教師の熱血解説が

生者あらん限り

死者は生きん

死者は生きん

牧師の子として聖職者志すも、生来の癩癩持ちが災いして挫折を繰り返して、画家としても不遇のまま謎の死を遂げたゴッホ。この言葉は呪いにも似て、生者と死者の魂を引き結ぶ。それは単に「死者の思い出が、生者の心の中にある」と述べているだけではなからう。死者の想いや願いは、それを思う生者の祈りで呼び覚まされ、この世に意味をもって現れる。形をもたない音楽が、人の記憶や記録と技によって蘇るごとくに、だ。思い出されることのなくなった魂は、もはや人の世には帰らない。

霊能者と呼ばれる人々の中には、守護霊の存在を語る者がいる。彼ら自身はことごとく胡散臭く、「霊がああ言った、こう言った」の類いは、およそ信じる気になれない。だが、他界した親が子や孫を、先祖が子孫を、案じて見守るというイメージはとても自然で、美しい。もし身体を車に喩えるなら、未熟なドライバーの傍らに座ったベテラン、道を知り、遠くや周りを見通せる先達である。折にふれ、「この先は急カーブ」、「自転車が突っ込んで来

る」と、的確な助言をもらえたら、なんとありがたいことか。

自分自身、死後に意識があるのなら、それが許されるものならば、そうありたい、そうしたい。さすれば死は新たな日々誕生の起点となる。

そもそも、自分が今あることは、先立つた数多の人々の想いと無縁ではあるまい。さればこそ日々、父母、祖母は言うに及ばず、親しく関わった者、遠い御先祖までを想い、毎日の感謝と永遠の冥福の念を届けるのが、生者当然の務めのように思われるのだ。

■「**呟きが聞こえる唇**」藤田嗣治：二人の女（7月19日、秋田県立美術館にて）

ブラジルでの作品か、インディオ風の女が二人、上半身だけ描かれている。一人は赤子を抱えている。

二人は同じものを見ていない。手前の女はややうつむき加減で前方を見つめ、退屈そう。奥の女は少し斜斜視気味に彼方を見やり、なにかを呟やいている。女同士の会話だろうげ、その唇が素晴らしい。

レオナルド・フジタといえば、「眠れる女」に描かれた

■「**雨が奏でる景色**」（7月19日 秋田県立美術館 水庭ラウンジ）

この美術館の設計者は、安藤忠雄だ。どことなく東京大学・福武ホールに似た雰囲気があるのは、なにか共通のコンセプトがあるからだろう。コンクリートに囲まれながらも、不思議な落ち着きを感じる。

全面ガラス張りのカフェの外は水庭と呼ばれる、視界一杯の水。空と雲、そして向かいの千秋公園の緑を写しこんだ静かな水面。12m×48mの黒い石作りの水盤が、広々横たわっているのだ。そこに庇の各所、等間隔の点から異なるテンポで落とされる雫、雫、雫。。。不定期に広がる波紋は、ぶつかり合い、重なり合い、水面に拡がってゆく。リズムのズレが織りなす二次元の視覚的シンフォニアだ。

と、雨が降って来た。

庇がない遠い縁の方から、パラパラとランダムに、少しずつ数を増しながら、波紋を拡げる。多数の広がる波紋は互いに牽制しあい、大きな輪を描けない。それでも、これまでに静かに時を刻んでいたエリアに、明確な侵略を開始する。静けさを映していた水面が、俄かに慌ただしくなる。小さ

ような乳白色の肌が有名だが、私が最も惹かれるのはその、繊細でゆらぎなく、凜として均一な、黒く細い線である。一本の黒髪の如き線が、空間を切り分けて、そこに存在する肉体の臨界を浮かび上がらせる。だがその線としての主張はあくまで控えめだ。元来、顔と虚空の間には黒い線などありはしないのだから。だが藤田の絵では、あたかもそうあることが当然のように、黒色であるにもかかわらず、すべての線に透明感がある。やさしく虚空を爪先でなぞった軌跡にも思える。

人体を線描すると平板になりがちだ。生き生きとした肉感が失せてしまう。線画に描出された表情は、ややもすると塗り絵か漫画のようになり、しばしば誇張が鼻につく。人中まで描き込んだ線描の唇は、存在が強すぎて顔の中でアンバランスになる。とりわけ唇の薄い人は描きづらい。しかし藤田の絵では、限りなく空気に近い線と巧みに配された陰影が立体感を生み、実体感を放っている。

控え目に何か言いかけて微かに開いた薄い唇は、艶めかしいほどに生き生きとして、漏れる吐息が聴こえるようだった。

な輪が数を増しつつ乱れ咲く。

雨が強くなった。

無数の波紋はもはや一つひとつの輪をなさず、我れ先に水面を叩いては、正しい円を描く前に掻き消されてゆく。

一面が喧騒の中に呑み込まれた。

風が吹いてきた。水面に波が立つ。

騒然と水面が泡立ち、揺らめく。徐々に風は強まり、さつきまで空を写し込んでいた一枚鏡は千々に砕け、中に収まっていた静かな世界が全て、幾重もの褶曲の中に飲み込まれた。

ガラス越しに聞こえる、さあつ、という雨音だけが私の身体を包む。

ほんの15分ほどの切り取られた時間に、胸の高鳴るような地球の歴史の一片を見る思いがした。ここはおそらく世界で最も、雨が美しく身える建築物の一つといえるのではないだろうか。

いつか機会があれば、次は、夕暮れに染まる水面のシンフォニアが見たい。そう想った。

かな外交を積み重ねてきた韓国と、その後ろに構えていた大国、中国である。我が国は、といえば、この問題には「日本的誠意」を以て取り組み、国際的には概ね解決したつもりでいた。だが中韓両国は断固としてこれを認めず、国際社会に日本の非を訴え続けてきたということだ。日本社会はこうした2国の力を侮って楽観視し、無為に時を重ねてきたのではないか？ あるいは今日ここに至るまで、事の深刻さが故意に隠されてきたのか？ よもや日本国内に他国の国策に呼応する輩は居なかったか？

ヘイトスピーチは、「基本的人権」まで侵すとなれば規制も当然だろう。だが同時に、「個人情報保護法」の例にあるように、なんでもお役所規則が拡大解釈される我が国にあつては、その適用範囲がデモのシュプレヒコールにまで広がらないか、危惧する声があるのも頷ける。規制推進派の高市早苗議員が、国会周辺の原発反対デモを嫌悪していた、との噂も無縁では無からう。「ヘイト」はいうまでもなく「憎しみ」である。憎み・憎まれる基本的構造を解かない限り、声にならない怨嗟はより深い憎悪を増幅するだけだ。声高な訴えそのものを嫌悪し、抑え込む規則の素が嫌悪感としたら、なんとも救いのない、浅慮である。

■「国辱の日」：国連関連組織が慰安婦問題／ヘイトスピーチで日本批判の決議（9月1日新聞報道）

新聞やTVによれば、2014年8月29日、「国連人種差別撤廃委員会」が「最終見解」を表明し、日本政府が慰安婦問題について旧日本軍による慰安婦への人権侵害についての調査結果をまとめ、謝罪と補償をするよう促した、という。これに併せて、いわゆるヘイトスピーチの法規制促進も同様に勧告された。なんのことはない。この二つは、特定の国の擁護に関わる案件である。それが世界的に発信されたわけだ。慰安婦問題で重要な意味を持つ吉田虚言の訂正記事発表（朝日新聞8月5、6日）も、すでに委員会の流れには逆らえなかったのだ。ちなみに上記委員会は国際連合の正規機関「国際連合人権理事会（UNHRC）」をとりまく「関連」委員会のひとつである。周辺組織とはいえ、一定の権威をもつ国際機関からこうした指摘、批判を受けることは、国と国民が国際的に貶められたに等しい。これはもはや「第二の敗戦」であり、8月29日は第二敗戦記念日として記憶されるべきだろう。

では、勝者はだれか。いうまでもなく二つの隣国、「恨」の一念で、六十余年をかけて周到かつ強（したた）

国際機関からの指摘を契機として、まずは最も客観的な「音量」からしつかり規制する体制が必要かと思われた。

■メンツと強弁：「クマラスワミー氏、報告修正の要なし」（9月4日夕刊）

スリランカ人法律家の特別報告官ラディカ・クマラスワミー氏（女性）は現在、国連総務のポストにある。旧日本軍の従軍慰安婦問題を取り上げた、いわゆる「クマラスワミ報告」（1996年）は、現代の家庭内暴力の廃絶を訴えた付属文書と同様、女性の権利擁護を謳った報告書と一体のもので、国連人権委員会（2006年改廃）の重要な業績の一つである。その同氏は朝日新聞の誤報謝罪について問われて答えた。仮に従軍慰安婦記事の誤謬や、強制連行体験の証言で知られる吉田清治氏（履歴不詳：自称出身校の名簿では死亡者？）の著書にねつ造があったとしても、他の資料があるので報告の結論に誤りは無い、と。ちなみにここでいうその他の資料には、当時（1990年代）の日弁連会長（兼：朝鮮総連代理人）土屋公献氏によって国連にもたらされたものが含まれる。日本軍による慰安婦の「強制連行」の有・無は重大な論点であるはずだ

が、同報告では慰安所管理への軍閥与や、軍自らが「犯罪」として処罰したインドネシアでの強制連行「事件」なども緋い交ぜにして、推定有罪の「国家犯罪」とされている。この報告は今日、世界各地で慰安婦像設置が認められる状況を大いに後押ししている。もはやひとり日本のみが弁解を重ねても、容易に消せない大火となっているのだ。そもそも1991年に慰安婦問題の火付け役だった朝日新聞記者の植村隆氏は、義母が従軍慰安婦訴訟団の団長だったとも言われている。これらの諸事を俯瞰すると、一連の「従軍慰安婦問題」には綿密に練り上げられた計画があったと考えざるを得ない。

国家と、我らの子孫をも含む国民に、極悪非道の性犯罪者のレッテルを貼ろうとする策謀には、冷静に賢く、かつ断固として対処する必要がある。誤報の「火付け犯」には、文字通りの「社命」を賭して世界に修正と謝罪を発信させねばならないが、同時に不当な国際キャンペーンがあれば否は否として明確に抗議しつつ、人権国家としてこれを払拭できるような国際貢献を、国を挙げて推進する必要があるだろう。前世紀の戦争ゆえに、われらが子・孫まで、今後とも謝罪し続けるような愚行は、断たねばならない。

うした「不自然の痼り」がうずいたのではないか？

フランス、イタリア、スペイン、デンマーク等々、一般の独立案否決にほっとした国は多いが、他山の石ではない。我が国でも、60年代からの琉球独立運動が近年「かりゆしクラブ」を核として再興しつつある。そんな折に地元紙が、沖縄人のルーツが遺伝子解析によって「日本由来」であることが明らかになった、と報じた(9月17日)。元来、琉球国の人々が「本土」の住人と同じ民族で、ひとつの文化圏にあることは沖縄出身の民俗学者も認める定説である。言語学者の助けを借りずとも、沖縄の島言葉ウチナーグチが、韓国語でも、まして中国語でもないことは容易にわかる。ウチナーグチはむしろ、日本語の古代の形に近いと思われる。その沖縄がかつて2分され、清国へ割譲される、とんでもない外交案があったと知った。日清戦争の直前、ロシアの南下策を警戒して朝鮮半島を抑えようと日本政府が焦っていた頃のことである。幸か不幸か戦争が起こり、割譲案は白紙に戻った。身内を差し出して和を図ろうとした、それこそ恥ずべき歴史秘話である。今、沖縄の人々が、大國間の綱引きで翻弄されてきた運命を乗り越え、己が道を自ら決めんと欲するのは無理からぬ話だ。とはいえ我ら

■「民意とは」 9月7日スコットランド独立賛成派が51% 9月18日 独立反対派が勝利

外に敵あらば結集し、内に敵を作らば分裂する。冷戦の終結から今日まで、復活した民族主義の亡霊が各所で分裂と紛争、戦争を生んでいる。人類の歴史は、群雄割拠が生む無数の抗争より、統合の調和を求めてきたはずだったが。英国、すなわち「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」の成立から約100年、イングランドがスコットランドを併呑してからはすでに300年以上が経つというに、住民の半数が分裂を希望とは。合邦時に消え残った「独立」の自尊心が、再燃したということだろう。

当時の「合邦」の蔭には、イングランドの周到な情報操作もあったらしい。「ロビンソンクルソーの冒険」作者であるダニエル・デフォーが、アン女王のエージェントとして世論操作に才能を発揮していたというのは、驚きだった。偽名でスコットランドに潜入し、歴史家から浮浪者にまで扮して各階層にアプローチし、合邦の利を説いて回ったそう。その効あつてか1707年、スコットランド議会の賛成を得て「連合法」が成立した。今般の騒動は、それが大事な身内である。諸外国の甘言や教唆に左右されることなく、冷静かつ賢明に、できればすべての日本国民と一体の思いで、進む道が判断されるよう望みたい。

定かには見えにくい世論の流動性は、海外からの誘導も含め、情報のネット化によって、より高まっているように思える。この数年、何度か我が国では、特定の新聞やTV局、広告機関に対して強い不信感が表出した。マスコミでは殆ど流されなかった、お台場のデモなどその例だ。「ネット界」では、真偽はともあれ、それらのトップは在日外国人ということになっているようだ。トップ一人の意向で報道機関を操作できるとも思えないが、もし、いくつもの虚偽や隠蔽、歪曲の反復で、気づかぬうちに社会全体の思潮が一方向、たとえば、あるは好戦論に、あるは〇〇国覇権に流されるとすれば、恐ろしいことである。

いずれの国との間でも、争うことなく、友好を深めることに有義あることは疑うまい。ただしそれには絶対的な前提条件がある。基本的人権の擁護と、自己の尊厳を守りつつ互いを敬う、互尊独尊である。国家が国家に介入して世論を誘導するような「ダニエル・デフォーの暗躍」は、厳しく指弾され、排除されるべきだろう。